

年頭のご挨拶

クロマトグラフィー科学会会長
浜瀬 健司

クロマトグラフィー科学会会員の皆様におかれましては、健やかな新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。日頃より本学会の活動に多大なるご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。昨年よりクロマトグラフィー科学会第18期の会長を仰せつかっております、九州大学大学院薬学研究院の浜瀬です。歴代会長の先生方や事務局長、編集委員長などに強力に支えて頂き、1年間何とか職務を果たして参りました。2025年の年頭にあたり、本学会の活動状況をご報告すると共に、ご挨拶を申し上げます。

クロマトグラフィー科学会は1989年（平成元年）の発足以来、クロマトグラフィーに関する分離・検出ならびに関連技術に特化した国内最大の学会として、年2回の学術集会（初夏のシンポジウムと秋の科学会議）の開催、クロマトグラフィー関連分野で優れた業績を出されている会員の方に対する各賞の授与、会誌（CHROMATOGRAPHY 誌）の編集発行などの事業を継続し、会員の皆様と共に歩んで参りました。

2019年の冬から始まったコロナ禍もかなり落ち着き、学術集会も当たり前のように対面で開催される状態が戻って参りました。2024年は第31回クロマトグラフィーシンポジウムが6月に那覇で開催され（実行委員長：新垣先生（琉球大理））、全日程が豪雨であった第29回クロマトグラフィーシンポジウム（2022年6月、石垣、浜瀬）とは全く異なり、天候に恵まれた沖縄色豊かな会でした。第35回科学会議は山梨大学の植田先生を実行委員長として11月に諏訪で開催され、諏訪湖と温泉に包まれてこちらも郷土色豊かな会でした。

学会誌（CHROMATOGRAPHY 誌）におきましては、2022年のインパクトファクターが1.7、2023年は1.8と順調に推移しており、2024年からは北川慎也実行委員長の下で更なる改革が行われております。30年以上使用してきた表紙デザインを刷新し、完全な国際英語学術論文誌として今後の一層の飛躍が期待されます。シンポジウムと科学会議において選考・授与される「CHROMATOGRAPHY Best Presentation Award」や、学生会員を第一著者として投稿・掲載された英語論文に対して選考・授与される「CHROMATOGRAPHY Outstanding Student Paper Award」、トラベルアワードも継続されており、いずれも若手研究者に対するモチベーションの向上と投稿数の増加に寄与していると思われま。

2025年は5月に大山先生（長崎大）を実行委員長として長崎で第32回シンポジウムが開催され、9月に久保先生（京都府立大）を実行委員長として京都で第36回科学会議が開催される予定です。また、2027年にはクロマトグラフィー分野で世界最大の国際会議（HPLC2027）を、クロマトグラフィー科学会の主催により日本で開催することも決定されました。本年も高柳副会長、北川文彦事務局長、北川慎也編集委員長をはじめ、理事・評議員の皆様と共に本会の益々の発展のために微力ですが精一杯努力して参る所存です。会員の皆様の一層のご支援ならびにご協力を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。